

今年の一年間

私の級では何をしてきたか



よい社会人

となる基礎を

永山 曉美

修了式を目前にして、年少組から受け持っている二年保育児を、小学校一年生として、

安心して送り出せるであろうかと、反省させられている。現在、受け持っている男女児十九名ずつは、入園の頃には、団体生活にはずれ勝ちな者、性格的に暗かったり、気難かしかったり依頼心の強すぎた者、発作的な言動のあった者、その他、特別注意を払わなければならなかった者も、一応安定して、日々の生活を楽しみ、明るく、自由なよい社会人となる基礎を作る事が出来たのではないかと思う。また、私自身どこか至らない為に、何回も同じ反省を繰返すようになってしまいが、

肝心な時には、きちんとときまりをつけられるような、幼児なりの自覚を、もう少し皆につけてやりたかったと残念に思っている。つくづくと故倉橋惣三先生に、ユーモアたっぷりな講義の中で教えていただいた一節を思い出し、その難しきを感じる。

「躰とは、窮屈なものだと思うのは大間違いで、却って自由になることである。躰られた人は、どんな場所に行っても、そのまふるまっついていればよいのだから、いつも自由で、幸福でいられるのである……」

この一年間を振り返って見ると、二年保育の仕上げの年として、目覚ましい幼児達の成長に、充分応じられたであろうかと反省される。先年度から引き続き力を注いできた生活指導には、二年の月日も長いとは言えない。幼児の教育には、何よりも根気が必要である。始めて今の組を受け持った時、「この幼児達一人ひとりの特徴を、決して損わないようにし

よう。」と決心をしたのを覚えている。そして、幾日も経たない中に、U君という元気でいつも私の手の中からはみ出している幼児のいる事が差し当たっての問題となった。体格は並はずれて大きく、年長組の保育室にしばしば入り込んでいたが、そこにおいても大きい方で、探しに行ってもちよつと見分けがつかない程、何処でも遊んでいた。家庭の生活程度も高い方でなく、おまけに何人か続いて亡くした末の男の子である為、また最近下に女児が産れたということもあり、思ったことを直ぐ行動に表すのが、派手で乱暴に見えるので、入園後間もない他の幼児達にとって、とかく恐れられていた。幸とU君の席が、私の真ん前であったが、その隣に坐っていたのが、これはまた最良の躰を家庭で受けて来たと思われる、お行儀のよい可憐なT子であった。ほんの、十分足らずのお集りの間に、T子は数回もわざわざ席を立てて来ては、首をか

しげながら訴えて、また、自分の席へ帰って行った。

「先生、Uちゃんが、私の足をふみました」。「先生、Uちゃんが、私の椅子を押します」。「先生、Uちゃんが、私の洋服を引っ張りました」。「先生、Uちゃんが、私のクレヨンをとりました」。「先生、Uちゃんは、私の髪の毛を引っ張っていけないんです」。

「Uちゃん、間違っしてしまつたのなら、あやまりましようね」。「ごめんなさい」U子は、Uちゃんのあやまるのを満足して、こっくりする。U君は、ぴよこんと下げた頭を五秒間位下を向けて、しょげているかと思えば、直ぐにいたずらっぽいくりくりした目で四方を見廻している。今、思い出せば微笑ましい光景でもあった。自由遊びの庭では、他人の使っている砂場のしゃもじを、いきなり取っていったり、女兒達が、大事そうに広げているごぎの上の小石を持って行ったや、皆が並んで順番にのっている、ぶらんこや、滑り台に割り込みをしたり、誰かの帽子をとってかぶったり、頻々とU君による被害が耳に入ってくる。

「Uちゃんのほしいものは、誰だつて皆ほしいのよ。代り番こに使うといいのだけれど、どうしてもほしい時は、先生に言つて頂戴ね。ほら、○ちゃんはUちゃんに持つて行かれて、泣きそうになつていて可哀そうよ。返してきてあげてね」

U君には、特に気をつけて、「そんなことをしてはいけませんよ。」とか、「そういうことは、わるいことですよ。」ということばを出来るだけ、使わないことにしていた。U君には、案外、やさしい面があつて、お友達靴が見えない時に探してあげたり、池の小亀が岩の上を上らして貰えないからといってじゃぶじゃぶ池の中に入って大亀を下してしまつたり（あつという間の出来事で、近くにいた私もU君の動機が分らない中はただ驚いてしまつた）、そういう時のU君は、見違えるばかりに子どもらしく頼もしい。

「Uちゃんは、困っている人を親切にしてあげたり、お手伝もよく出来るし、何でも先生に言えるし偉いわね。何も言わないで泣いている人があつたら、代りに先生に言つてあげて頂戴ね。お友達にいじわるしたり、困らせたりする人があつたら、いけな

いんだよつて教えてあげてね」

U君に、なるべく他の幼児を、第三者として見る機会を作るように心掛けた。あれから二年近く経つた現在「Uちゃんは、いたずらだけど、親切なときもあるね」というのが定評であるようなので、ほつとしてゐる。

常々、どんな幼児でも、他の人に愛される明るさと素直さを持つ可愛い子どもにすることは、先生の責任だと思ふ。家庭の事情等で暗い性格、いじけた態度になつてしまつた幼児を、可愛気のない子どもなどと言われるが半年以上幼稚園に通つている中には、この年頃の子どものらしき可愛さが出てきて、その幼児の笑顔は忘れ難くなる。始めは努めて可愛いと思ひ、他の幼児より屢々触れ合つて行く中に、何か溶けていくものがあるのだと思ふ。

(洗足学園幼稚園)

日々の歩み

(成功と失敗の反省)

宮崎 洋子

生きた保育とはどういふものだろうか。